



TITLE:

# マルクスの労働価値論の根本命題に就て(一)

AUTHOR(S):

堀, 經夫

---

CITATION:

堀, 經夫. マルクスの労働価値論の根本命題に就て(一). 經濟論叢 1920, 11(2): 204-217

ISSUE DATE:

1920-08

URL:

<https://doi.org/10.14989/127689>

RIGHT:

# 京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第二號

第十卷

## 論說

德川時代の税制……………法學博士 瀧本 誠一

基礎社會の發達方向(一)……………文學士 高田 保馬

租税の限度に就きて(二・完)……………法學博士 神戸 正雄

鎌倉時代の家族制度(七・完)……………文學博士 三浦 周行

マルクスの勞働價值論の根本命題(一)經濟學士 堀 經夫

## 時事問題

經濟界不安の繼續……………法學博士 戸田 海市

超過所得税論……………法學博士 小川郷太郎

## 雜錄

現代支那に於ける社會上の一缺陷……………文學士 小島 祐馬

收穫遞増減の諸觀點……………法學士 石川 興二

ラレーの「和蘭貿易に關する考察」……………法學士 山口正太郎

近刊の經濟史に關する三著述……………法學士 本庄榮治郎

## マルクスの労働價值論の根本命題に就て (一)

堀 經 夫

マルクスの價值論は、普通に労働價值論と稱せらるゝ所のものである。今其根本の主張をマルクスの言葉を用ひて言ひ表はすならば、

『……一の使用價值の價值の大小を決定するものは、社會的に必要なる労働の分量、若くは其使用價值の生産に向つて社會的に必要なる労働時間に外ならぬ』。

と云ふ命題がそれであらうと考へらるゝ。

本論文の目的とする所は、右命題に關して重要なと思惟する次の二點の檢索にある。即ち第一は、價值なる言葉は、マルクスに於ては如何なる概念として取扱はれて居るか、と云ふ事である。蓋しマルクスは、スミス、リカード、ミル等と異り、價值といふ言葉と交換價值といふ言葉を區別して使用して居るので、此兩者の各々に果して如何なる意義を附して居るかを考察することは、極めて興味ある問題だからである。されば余は便宜上、『マルクスの所謂價值及び交換價值』といふ題下に此問題を研究するであらう。而して第二の問題は、マルクスが價值の大小を測定する標準として採用したる『社會的に必要なる労働(時間)』の意義如何と云ふ事である。蓋し『社會的に必要なる労働(時間)』といふことは、マルクスが『資本論』の或場所に於て言ひし如く、『現

1) 一の使用價值といふのは一の財の意である。

2) Karl Marx, Das Kapital, I. S. 6. (圈點は新たに附す以下之に準ず)

在の社會的、標準的生產諸條件と、勞動の熟練及び能率の社會的平均程度とを以て、何等かの使用價值を表現するに要する勞動時間を指す」のみであるならば、比較的簡單で容易に領かる、概念であるけれども、其中に或商品に對する社會的需要——分量的に常に變動する所の——を充たすに必要な勞動時間と云ふ意味が、同時に含まれてゐるのでは無からうかと云ふ疑問が提出さるゝことになる、問題は爾かく單純に取扱ふを許さないことに爲るからである。

## 一 マルクスの所謂價值及び交換價值

(A) アダム・スミスに其源を發し、リカアドー、マルサスを経、ミルに至つて集大成せられたる英國正統學派に於ては、價值なる語を廣義に解するときには、之に使用價值(即ち效用)と交換價值との兩概念と合せ意味せしむるも、之を狹義に解するときには、單に交換價值——これを支配する諸の原則を研究するのが經濟學の主たる目的とされてゐる——なる語の代用たらしむることを、(即ち使用價值を效用と云ふに對し、價值を交換價值の略稱たらしむることを)、其經濟學上の慣習となし來つた。例へばスミスの『諸國民の富』には次の如く説明してある。

「價值」といふ言葉は二つの異なる意義を有つて居る、といふことが觀察さるべきである、即ち或時は或特定物の效用を言ひ表はし、而して或時は其物の所有より生ずる所の、他の財を購買するの力を言ひ表はす。一を「使用上の價值」と稱し、他を「交換上の價值」と言ふ。」

又例へばミルの『經濟原論』には次の如く述べてある。

- 1) Karl Marx, Das Kapital, I. S. 5. 譯文はマルクス全集高島氏譯『資本論』第一卷第一冊(一〇頁)に據る。
- 2) Adam Smith, Wealth of Nations, Connan's edition, p. 31.

『價值といふ言葉は、附屬語なしに用ひらるゝときは、經濟學に於ては常に交換上の價值を、或は……交換價值……を意味する』。

然るにマルクスに在つては、上述の如き正統學派的の慣習が必らずしも襲踏されて居ない。此點はマルクスを評釋する多くの學者の既に氣付ける所のやうである。

例へばフウゴ・リークスの著書は、『價值と交換價值、マルクス價值論の批判』と名付けてあるが、只此の題名より見るも、彼がマルクスの所謂價值と交換價值とを別個の意味を有するものとして取扱ひたる事が推知されやう。更に書中説く所を讀むとき、此事は愈々明白となる。

『使用價值は、交換價值の基礎となり、價值は交換價值の尺度(Maassstab) 高度(Höhe)となる』<sup>1)</sup>。又カアル・カウツキーは、其著『カアル・マルクスの經濟論』に於て次の如く言つて居る。

「……使用價值が一度び商品となるや否や、即ち使用價值が互に交換せらるゝに至るや否や、我は此交換が常に一定の數量比例を以て行はるゝことを認める。そして一の商品と他の商品との交換比例を、其交換價值と呼ぶ。此比例は勿論時と處とによつて異なる。けれども、一定の時、一定の處に就いて考へるならば、その大さは常に一定して居る。(中略)」

然しながら、一商品の交換價值は、其外見に於ては如何に種々雜多であつても、之を一定の時、一定の處に就いて考へて見れば、其根柢には、常に同一の内容が横はつて居る。……我々は此内容を商品の價值と呼ぶ』

彼がマルクス説の解釋を爲すに當り、商品の交換價值とその價值とを別個の概念となし居ること

- 1) J. S. Mill, Principles of Political Economy, Ashley's edition, p. 437.
- 2) Dr. Hugo Riekcs, Wert und Tauschwert. Zur Kritik der Marx'schen Wertlehre.
- 3) Ibid. II. Die Beziehung zwischen Wert und Tauschwert, 4. Arbeit und Wert. S. 33.
- 4) Karl Kautsky, Karl Marx' Oekonomische Lehren. S. 16. 譯文は高島氏譯『資本論解説』二三頁乃至二四頁に據る。

は、以上の引用文で以て明白であらう。

更に又フランツ・ペツリーは、其著『マルクス價值説の社會的内容』中に於て次の如く論じて居る。

『大抵の價值説に於ては、價值と交換價值とは別個のものでなく、而して「價值」と名付けらるるものについては、——現象が如何に複雑なる變化をなさうとも、——財の交換關係に對する直接なる關係——原因としてか、尺度としてか、或はそれに類似したるものとしての、——が主張さるゝのであるが、マルクスにとつては、一の財を「價值」として理解することは、財の具體的交換關係、即ち財の交換價值に關し、未だ何事をも語つて居ないのである。云々』<sup>1)</sup>

尙ほアペリングも、其著『學生用マルクス』に於て、第一部、第一章、第一節を『三種の價值』と題し、使用價值、價值、及び交換價值の各々に就て次の如き簡單なる説明を下して居る。

『使用價值。… 使用價值は商品に内在するものであつて、商品を離れては存在することが出來ぬ。商品の使用價值は商品交換の基礎となり、富の實質をなすものであつて、其商品の消費によつて初めて實現されるものであり、又第三種の價值、即ち交換價值の貯藏庫となるものである』。

『價值。……そして交換價值の觀念に達する爲めには、其間に、使用價值とは別物たる、價值の觀念を通過しなければならぬ。……商品の價值とは、其うちに體現せられて居る抽象的勞働の分量である』。

1) Franz Petry, Der Soziale Gehalt der Marxschen Werttheorie. S. 27.

『交換價值。交換價值とは、使用價值の交換せられる比例である。商品の使用價值とは別物たる、商品の價值の表示せられる形式である』<sup>1)</sup>。

以上例示したる如く、多くの學者は既に、マルクスが英國正統派學者と異り價值と交換價值とを別種概念として取扱つて居ることを認めて居る。併し乍ら此等の人々は、單にマルクスが交換價值と價值とを區別したることを記載するに止まり、或はマルクスが此兩者の各々に附したる意義を定義的に約言せるに止まり、進んで兩者の關係及び其各々に特有なる意義を詳細に説明して居ないやうである。況んやマルクスを評釋せる學者中、マルクスの所謂價值と交換價值とを全然區別せず、或は此兩者を全然同一概念なりと主張する人々の著書に在りては、上記の點につき何等の顧慮が用ひられて居ないのは勿論である。されば余は、項を改めて直接マルクスの原文につき、その交換價值及び價值の區別及び關係に關する意見を檢索する積りであるが、一應それに先ち、マルクスの所謂價值及び交換價值の區別を認めざる學者の一二を例示することも、無用ではなからう。

例へば最近に舶載したエム・ベールの『カアル・マルクス。彼れの生涯及び彼れの學說』には次の如く述べてある。

『從て、マルクスに據れば、交換價值は次の如く定義さるゝ。一商品の交換價值は、その再生産が必要とする所の、社會的に必要なる労働の分量より成る』<sup>2)</sup>。

即ちベールは、商品の生産のため社會的に必要なる労働の分量が、その交換價值を測定するもの

1) Edward Aveling, The Student's Marx, Part I. Commodities and Money. Chap. I. Commodities. Section I.-The three Values. pp. 2-3. 譯文は山川氏著『資本論大綱』(二頁四頁)に據る。

2) M. Beer, Karl Marx: Sein Leben und seine Lehre, Berlin 1919. S. 8.

とマルクスが主張して居るやうに解釋して居るのである。併しマルクスは明かに

『一の使用價值或は一の財は、抽象的人間労働が其中に體化され、或は實體化されて居るが故にのみ價值を有するのである。然らば此價值の大きさは、如何にして之を測るか。曰く、使用價值の中に含まるゝ「價值形成實體」即ち労働の分量によつて之を測る。云々』<sup>1)</sup>

と言つて居るのであるから、ベールが交換價值と謂へるは、實は悉くマルクスが價值と謂へるものに該當せることを發見するのである。

又河上博士は、『マルクスの社會主義の理論的體系』の説明に於て、労働價值論の大意を述べて居らるゝ際、次の如く言つて居らるゝ。

『なほマルクスが問題とする所の價值なるものは、商品の交換價值であることを、注意しなければならぬ。

アダム・スミス以來殆ど凡ての正統派經濟學者は、物の價值を分つて使用價值と交換價值として居る。…(中略)…而してマルクスの經濟論に價值と謂へるは、即ち此交換價值のことである』<sup>2)</sup>

斯くて博士は、『資本論』第一卷第一部第一章第一節中のマルクスの原文を引用して、其引用文中二箇處に註を加へて『從て交換價值即ちマルクスの所謂價值』と言つて居らるゝ。

是に由て觀れば、博士は、マルクスが正統派經濟學者と同じく、價值なる言葉を狹義に使用して交換價值と意味せしめて居る、と解して居らるゝやうである。<sup>3)</sup>

1) Karl Marx, Das Kapital, I. S. 5. 高島氏譯本(九頁)に據る。  
2) 高島氏の譯文中「……されて居るが故にのみの價值を……」とあれどもは冗語なるを以て之を省けり。  
3) 河上博士著「社會問題研究」(第八册一四頁)  
4) 此點に關しては、大山千代雄氏が曾て「雄辯」(第十卷第十三號)に於て「福田博士とマルクス労働價值論」を論ぜられし序に、適切なる注意を加へられた。



(B) マルクスは、資本論第一卷第一章の最初の部分に於ては、使用價值と交換價值とに就いて説明を加へて居る。曰く。

『物の有用性は、其物を使用價值たらしめる』<sup>1)</sup>

『使用價值は、只使用若くは消費に依つてのみ使用價值たるの實を現す。……そして吾々の考案せんとする社會形態に於ては、それは(即ち使用價值は)<sup>2)</sup>同時に又、交換價值實材的負擔者を形成するのである』<sup>3)</sup>

『交換價值は先づ、分量關係、即ち一種類の使用價值が他種類の使用價值と交換せらるゝ比例(此の比例は時と處とに準じて絶えず變化する)として現はれる。故に交換價值は偶然的な純相對的なもので、隨つて商品に内在固有なる交換價值(固有價值)ありと云ふは、一の形容矛盾であるかに見える……』<sup>4)</sup>

「諸商品は使用價值としては、互に質を異にすると云ふことが先に立つが、交換價值としては唯だ量を異にし得るに過ぎぬ、即ち使用價值の一原子をも含まぬのである」<sup>5)</sup>

此等の文字を一見するとき吾々は、マルクスが商品を経質の方面より觀察して使用價值なる概念を、又之を量の方面より觀察して交換價值なる概念を、構成したるかの如く看做し、斯くて動もすれば、此點に就てマルクスを英國正統派經濟學者と同様なる立場に在るものと考へ易いのである。従て『資本論』の後の部分に於て單に價值なる言葉が使用さるゝ場合にも、之を交換價值の略稱なりと解し、『マルクスが問題とする所の價值なるものは、商品の交換價值である』と主張する

1) Marx, Das Kapital, I. S. 2. 高島氏譯本(三頁)に據る。

2) 引用者挿入

3) Marx, Das Kapital, I. S. 2. 高島氏譯本(四頁)に據る。

4) Marx, Das Kapital, I. S. 2. 高島氏譯本(四頁)に據る。

5) Marx, Das Kapital, I. S. 4. 高島氏譯本(七頁)に據る。

に至るのであるが、マルクスが次の如く言つて居るのを見ると、此主張の當らざることが明かとなるであらう。曰く。

『本章の冒頭に於て世間並みに、商品は使用價值及び交換價值であると言つたが、それは嚴密に云ふと誤りである。商品は寧ろ使用價值即ち使用對象であり、又「價值」である。云々』<sup>1)</sup>

マルクスの言に據て觀れば、各商品を別々に觀察するときは、それは使用價值並びに價值であつて「商品」を他の商品との交換關係に置くときに始めて交換價值なる特質を帶ぶるに至るのである。以下其然る所以を論證しやう。

マルクスは、商品の交換價值を説明するに當つて、例を採つて次の如く言つて居る。

『一定の商品、例へば一クォーターの小麥は、 $X$ 量の靴墨、 $Y$ 量の絹、 $Z$ 量の金、約して云へば種々様々な比例に於ける他の諸商品と交換される。されば小麥は、單一の交換價值のみを有するものでなく、多數の交換價值を有してゐるのである。然るに $X$ 量の靴墨は、 $Y$ 量の絹や、 $Z$ 量の金などと同じく、總て一クォーターの小麥の交換價值であるから、 $X$ 量の靴墨、 $Y$ 量の絹、 $Z$ 量の金などは交互に置換へ得る若くは互に其大さを等しうする交換價值であらねばならぬ。そこで第一に斯う云ふ結論が生ずる。即ち同じ一商品の有效なる諸交換價值は一箇の等一物<sup>アインゲライツ</sup>を表章する。然るに第二、總じて交換價值なるものは、それ自身と區別し得らるゝ或内容の表章法、即ち「現象形態」たり得るのみである』

斯くてマルクスは、——重複を厭はずして、同じ意味のことを繰返し述ぶるならば、——第一

1) Marx, Das Kapital, I. S. 27. 高島氏譯本(五五頁)に據る。此點は前掲大山氏も引用されて居る。  
2) Marx, Das Kapital, I. S. 3. 高島氏譯本(五頁)に據る。

に商品の諸交換價值は一の共通物に約元することが出来る(恰かも吾々が、幾何學上總ての直線形の面積を決定し比較する爲に、それ等を三角形に分解し約元するが如くに)と云ふこと、及び第二に一般に交換價值なるものは、商品に共通なる或内在物を社會現象として外部に表章したるものに過ぎないと云ふこと、の二命題を得たのである。此等兩命題は互に離つべからざる關係を有して居るのであるが、説明の便宜上之を別々に考へ、以てマルクスの意の存する所を忖度しやうと思ふ。

第一に、商品の諸交換價值が表章する所の、一箇の等一物若くは共通物とは何を意味するや、の問題を研究することとする。マルクスは此共通物として、先づ諸商品の幾何學的、物理學的、化學的、若くは其他の自然的性質を考へた。併し此等の性質は商品を使用價值たらしむる限りに於てのみ重要であつて、其交換價值を考ふる場合には何等の役目をも果さないことを發見した。<sup>1)</sup> 仍てマルクスは商品實體から、その幾何學的、物理學的、化學的、若くは其他の自然的性質を、別言すればその使用價值を、分離せしめて考察することにより、

『そこで、商品體を其の使用價值から離れ見るときは、殘る所は唯だ勞働生産物たる一性質のみである』<sup>2)</sup>

との結論に到達したのである。

抑も勞働とは『人間の腦髓や、筋肉や、神經や、手などの生産的支出』<sup>3)</sup>の謂であつて、決して人間以外のもの、例へば天然力、機械力等の如きものを謂ふのではないから、各貨物が社會の人

1) Marx, Das Kapital, I. S. 3. 高島氏譯本(六頁)参照。

2) Marx, Das Kapital, I. S. 4. 高島氏譯本(七頁)に據る。

3) Marx, Das Kapital, I. S. 10. 高島氏譯本(二〇頁)に據る。

人の間に轉々賣買さるゝに當つて、其交換の割合を第一次的に決定するものは、各貨物の生産に費されたる人間労働の總量であるとするは、理論上一應考へ得べきことである。アダム・スミスが『一々のものゝ眞實の價格は、即ち其れを獲得せんと望める人の眞に支拂はなければならぬ所のものは、それを獲得するの骨折り及び困難である。一々のものが、それを獲得せし人、及びそれを處分せんと欲する人、即ちそれを何等か他の物と交換せんと欲する人に對して、眞實に價值ある所以は、そのものが其人をして之を免れしめ更に之を他人に課することを得せしむる所の骨折り及び困難である』<sup>1)</sup>

と謂へるが如き、又リカアドーが其著『經濟及び財政原論』に於て、

『一商品の價值は、換言せば其の商品と交換さるゝ或他の商品の分量は、其の商品の生産に必要な労働の相對的分量に依つて定まり、其の労働に對して支拂はるゝ報酬の大小に依つて定まるものでない』<sup>2)</sup>

と謂へるが如き、皆軌を一にして居るやうである。

併し乍ら、此等の學者は、商品の生産に必要な労働とは、互に質を異にする所の具體的生產活動の意なりや、或は一般に人間の精神的及び肉體的活動を意味する所の抽象的労働の意なりやに就ては、詳細に之が説明を下して居らないのである。しかるにマルクスは此點に關し次の如く述べてゐる。

1) Adam Smith, *Wealth of Nations*. Cannan's edition, p. 32.

2) Ricardo, *Principles of Political Economy and Taxation*. Gonner's edition, p. 5.

『吾々が労働生産物の使用價值から抽象するのは、同時に又、労働生産物を使用價值たらしめる諸々の有形的成分及び形態から抽象する所以である。斯くて労働生産物は、もはや桌子でもなく、家でもなく、紡絲でもなく、又他の何等の有用物でもない。労働生産物の總ての有形的性質は消え去つて居る。其れは又、もはや指物労働、建築労働、紡績労働、其他一定の生産的労働の産物ではない。労働諸生産物の有用的性質と共に、それ等諸生産物に體現された諸労働の有用的性質も亦消滅し、これら諸労働の種々なる具體的形態も亦消滅する。諸労働は最早互に相異なる所なく、總てが等一なる人間労働、即ち抽象的人間労働に約元されてゐる』<sup>1)</sup>

即ちマルクスに據れば、商品の生産に必要な労働とは、具體的の諸目的を離れたる等一の抽象的人間労働の謂であつて、而して各商品の交換の割合を決定するものは、各商品中に含まるゝ此抽象的人間労働の分量に外ならぬ。従て各商品を其交換價值の方面のみより觀察するときは、それは單に『無差別なる人間労働の、換言すれば其支出の形式に頓着なき人間労働力の支出の、單なる凝結』<sup>2)</sup>に過ぎないのである。而してマルクスは、總ての商品を、それ等に共通なる社會的實體——即ち人間労働——の結晶體として考ふるときに、之を價值或は商品價值と呼んだのである。

斯くて此價值の大きさは、使用價值(即ち財)の中に含まるゝ『價值形成實體』(即ち労働)の分量に依つて之を測るのであるから、マルクスの考に據れば、一商品の有效なる諸交換價值は、其生産に費されたる抽象的人間労働を、若くは價值なる一箇の等一物を、表章して居るといふことにな

1) Marx, Das Kapital, I. S. 4. 高島氏譯本(七頁乃至八頁)に據る。

2) Marx, Das Kapital, I. S. 4.

3) Marx, Das Kapital, I. S. 5.

るのである。マルクスは這般の消息を次の如く語つて居る。

『諸商品の交換關係に於て、其交換價值は、其諸々の使用價值から全く獨立のものなることは、既に吾々の見た所である。然るに勞働諸生産物の使用價值を實際に抽象し去つてしまふと、上に限定されたやうな其の價值が残る。故に商品の交換關係、若くは交換價值に現はれる所の共通物は、即ち其商品の價值である』<sup>1)</sup>

以上述べ來りたる所により、マルクスの第一命題、即ち『一商品の諸交換價值は、一箇の等一物(若くは共通物)を表章する』といふことの意味は、略ぼ明かになつたと思ふが、更にマルクスの設けた第二の命題、即ち『總じて交換價值なるものは、それ自身と區別し得らるゝ或内容の表章法、即ち「現象形體」たり得るのみである』といふことの意味も、以上の説明から自ら判明することにならうと思ふ。蓋し上述せる所によつて明かなる如く、マルクスに在つては、凡そ交換價值なるものは、單獨に考へられたる一商品に就ては構成され得ない所の概念であつて、二個以上の商品を互に交換する場合に始めて考へらるゝものである。而して此場合には、各商品に内在せる使用價值及び價值なる両性質中獨り後者のみが問題となり來り、此の價值を目安として各商品の交換が行はれ、從て各商品の交換價值が定まるのである。價值は内容であつて、交換價值は現象である。價值は絶對的概念であつて、交換價值は相對的概念である。これマルクスの第二命題の生ずる所以である。

以上を以て、余は、マルクスが商品の交換價值を解説するに當つて下したる二個の命題を説明

了へたのであるが、此等の説明は同時に、マルクスの所謂價值なる概念と所謂交換價值なる概念との區別を明瞭ならしめ得たものと信ずる。

今試みにマルクスの所謂價值と交換價值との區別を約言して見るならば、次の如くなるであらうと思ふ。

商品の價值とは、その生産に人間の労働が費されて居るといふ事實より發生する所の、商品の一性質であつて、その大小は商品の(再)生産に必要な抽象的人間労働の分量によつて測定し得らるゝ。即ち或一商品に就て云へば、その生産に必要な人間労働の分量がより大になれば、その價值は増加し、その分量がより小になれば、その價值は減少するのである。しかるに商品の生産に費さるゝ労働の分量の大小は、労働の生産力の大小に反比例する。されば『學生用マルクス』には、 $N = \frac{P}{P_0}$ なる數學式を用ひて此理を説明して居る。(Pは價值を、 $P_0$ は労働の分量を、而してPは生産力を示す)。

商品の價值の意義は以上述ぶる如くであるが、惟ふに一の商品を他の商品に對比して考へるのでなければ、一商品の價值なる概念は殆んど其機能を發揮し得ないのである。即ち一商品の生産に要する労働が如何に減少しやうとも、換言すれば其商品の絶對價值が如何に下落しやうとも、それのみでは殆んど無意義であつて、之を他の商品と對比するとき、即ち他の商品との交換關係に置くとき、茲に始めて重要な意義を生ずることとなる。而かも一商品と他の商品との交換關係に置くとき、吾々は最早價值なる各商品の内在的性質とは異なる外部的、表現的の相對形式

——即ち交換價值——に着目して居るのである。斯くて價值は交換價值の内容となり、その尺度となり、而して交換價值は價值の表現形態となるのである。

マルクスが後に至つて、

『……若し吾々が諸商品は只だ同じ社會的單位の、即ち人間勞動の表章である限りに於てのみ、價值對象性を有すること、隨つて又諸商品の價值對象性は純社會的のものであることを思ひ浮べるならば、此價值對象性は、商品對商品の社會關係に於てのみ現はれ (erscheinen) 得るものであることは自明である。實際また吾々は曩に、價值を見出す爲に、それを匿まつて (verstecken) 居る商品の交換價值若くは交換關係から出發した。吾々は、今また、價值の此の現象形態に立ち戻らなければならぬ』。

と言へるは、明かに以上述べたる彼れの價值及び交換價值に對する區別觀を裏書するものであらうと思ふ。

- 1) 原文には、「それに(交換價值の中に)匿まれて居る價值を見出す爲めに云々」とあるのである。
- 2) 交換價值の意なり。
- 3) Marx, Das Kapital, S. 14. 高崑氏譯本(二八頁)に據る。